

## 主観的幸福度と創造的態度との関連性の実態調査

青木徹 (Aoki Toru)<sup>1</sup>, 井澤裕司<sup>2</sup> (Izawa Hiroshi)

本稿では、大学生の主観的幸福度と創造的態度の関連性を検討することを目的とし、大学生を対象にアンケート調査を行った。その結果、①男女差はあるものの創造的態度が高い学生は主観的幸福度も高いこと、②主観的幸福度が高い学生は低い学生よりも柔軟性、進取性、想像性、持続性、協調性が有意に高く、分析性には有意な差はないということが明らかとなった。以上のことから、創造的態度を高める活動は主観的幸福度を高める可能性が示唆された。

キーワード：主観的幸福度，創造的態度，大学生，教育

JEL 分類番号 I31, I23

### 1. はじめに

「幸福」に関する研究は 1970 年代以降、経済学分野においても発展してきており、これまで多くの実証研究が行われてきた。Easterlin (1974) をはじめとする多くの研究では、アメリカにおいては一人当たりの所得水準が大幅に増加したにも関わらず、幸福度の水準は過去 50 年間あまり上昇していないと報告している。このことはアメリカにかかわらず、日本やヨーロッパ諸国でも同様の結果が確認されており、所得と幸福度の時系列データの相関が小さいという現象を「幸福のパラドックス」と呼ばれている。この「幸福のパラドックス」の提唱を契機に、国内総生産(GDP)だけで国の豊かさを計測することはできないと認識され、国の豊かさを計測する新たな指標作成の試みがなされている。わが国でも、2010 年から「幸福度に関する研究報告会」が開催され、幸福度指標に関する研究が進められている。OECD (2017) では、所得や雇用、健康状態、市民生活とガバナンス、社会との繋がりなど様々な指標を用いて OECD 加盟国の幸福度を調査しているが、日本は全体的に見て、低い順位であることが挙げられた。そして、他の国と比べて、青少年の自殺率の高さや健康だと感じている人の割合が低いといった問題が明らかとなった。

幸福度を高めることは、様々な社会問題を解決するためにも重要であり、幸福度に関する調査研究を進めることは、わが国にとって重要な課題の一つである。本項では特に、主観的幸福度に創造性態度が与える影響に注目する。

Fredrickson (1998) は、主観的幸福度を高めると、創造性が高まると報告しており、

---

<sup>1</sup> 立命館大学大学院経済学研究科  
e-mail: ec0420kh@ed.ritsumei.ac.jp

<sup>2</sup> 立命館大学大学院経済学研究科  
e-mail: izawa@ec.ritsumei.ac.jp

創造性と主観的幸福度の関係性が示唆されている。一方で、教育により高められる創造性を育成することで主観的幸福度も高められる可能性があると考えられる。しかし、幸福度や創造性は多義的で定義が明確でない。よって、以下では幸福度と創造性の定義を明らかにした上で、それらの関連性に着目し、普通教育の中で幸福度と創造性を高める手立てについて検討することを目的とする。

## 2. 主観的幸福度と創造性の視点

「幸福」に対する研究は、紀元前の哲学者による思想から始まり、今日では、社会学や心理学、経済学の分野でも研究されるようになった。Richard (2005) は幸福に影響を及ぼす因子として Family relation (家族関係), Financial situation (家計状況), Work (仕事), Community and friends (コミュニティと友人), Health (健康), Personal freedom (個人の自由), Personal values (個人の価値観) の7つを取り上げた (Big Seven)。また、長期間にわたってこの研究を行なった Shenk (2009)によれば、所得は生活に必要なだけを確認することができれば、それ以上は幸福につながるとは限らず、それ以上の幸福につながる要因として、思いやり、愛、感謝、信頼などのポジティブな感情が人々の幸せにつながると報告している。けれども、世界各国で幸福度に影響する要因を調査されているものの、一般に受け入れられている幸福自体の定義はないように思われる。例えば Diener et al. (1999)は、主観的幸福感とは人生の人生に対する認知的評価とその評価をした感情の両側面をとらえ、主観的幸福度は「認知的評価と感情的評価の両側面からなるもの」としている。また普通教育では、認知側面・感情側面を含めた主観的幸福度を高めるような手立てを検討することが重要とされている。

一方、創造性研究も世界的に広く行われており、様々な先行研究が存在するが、それぞれの視点から定義されており、厳密な指標は見出されていない。例えば、恩田(1994)は、学校教育の視点から、創造性とは、本人にとって新しく意義のあるものを大切にする「自己実現の創造性」だと主張している。また、Sternberg (2003)は、創造性とは、新奇で、高品質を持つ課題に合った結果を生み出すことのできる能力であると述べており、ビジネス的な視点で創造性を定義している。

### 2. 3. 主観的幸福度と創造性の関連性

創造性と主観的幸福度の関連性を調査した研究では、Fredrickson (1998)によると、高いウェルビーイング度（主観的幸福度）になると創造性が高まるという拡張—形成理論 (Broaden-and-Build theory) を示した。

しかし、このようなビジネス的観点での考え方での幸福度と創造性の関係についての先

行研究では、教育的観点でも同様に適用できるかは分からない。そこで、本研究では一般的に使用可能な尺度を用いた創造的態度（繁樹ら，1993）と主観的幸福度（島井ら，2004）の関係を明らかにするとともに、学校教育の中で幸福度と創造性を高める手立てを検討する。用いるデータは、青木・福井(2019)と同一であるが、ここでは、幸福度が創造性に影響を与えるのか、創造性が幸福度に影響を与えるのかの因果関係が明らかとなっていない。そのため、本研究では創造性の高低と幸福度の関係を検証するとともに、性別の相違にも注目しながら創造性の観点から幸福度を検討する。

さらに創造性を構成する諸因子が、主観的幸福度とどのような関係にあるのかも併せて検証する。

### 3. 結果

#### 3. 1. データ

本調査で用いた調査用紙には、日本版主観的幸福度尺度と、日本版創造的態度、個人属性を含む 57 項目から構成されている。回答は主観的幸福度については全て 1 点(全く当てはまらない)から 5 点(非常によく当てはまる)までの 5 件法で、4 項目について質問を行った。創造的態度についても同様に 5 件法で回答させた。研究で用いるデータは立命館大学に所属する男女 781 名の学生を対象として行い、そのうち有効回答数は 718 名であった。そして、今回得られた主観的幸福度、創造的態度因子の各変数についての記述統計量を表 1 に示した。

表 1 記述統計量

変数名	観測数	平均	標準偏差	最小値	最大値
主観的幸福度	718	13.63	2.67	4	20
性別ダミー	718	0.44	0.49	0	1
(0:男性(318)1:女性(400))					
柔軟性	718	51.01	9.25	17	83
分析性	718	27.93	4.91	12	45
進取性	718	35.03	5.91	12	50
持続性	718	20.06	3.39	9	30
想像性	718	17.64	2.91	7	25
協調性	718	18.57	2.9	6	25

#### 3. 2. 推定結果

主観的幸福度と創造性・性別の関連性を把握する。創造的態度は各因子の総得点を算出し、創造的態度各因子のポイントの合計点である創造性ポイントの平均点（170.26）を基準に低創造性群と高創造性群に分類した。そして、創造性（低創造性群・高創造性群）と性別（男性・女性）を独立変数、主観的幸福度を従属変数とした 2 × 2 の分散分析

を行った（表 2）。

表 2 二元配置分散分析 結果

	低創造性群		高創造性群		主効果		
	男性	女性	男性	女性	創造性	性別	交互作用
主観的幸福度	12.70	13.33	14.20	14.58	50.00*	6.80**	0.51
	2.39	2.71	2.50	2.75			

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表 2 の結果から主観的幸福度には交互作用が見られなかった ( $F(1, 714) = 0.51$ , n.s.) が, 創造性, 性別ともに有意な主効果が見られた。そこで, 主観的幸福度について低創造性群と高創造性群, 男性と女性における平均の差について対応のない t 検定を行った。(表 3・表 4)。

表 3 各群の主観的幸福度の比較

	低創造性群 (n=378)	高創造性群 (n=340)	t 値
平均	12.98	14.37	-7.17 **
S.D.	2.56	2.62	

\*\* $p < .01$

( $df=716, n=718$ )

表 4 男女間的主観的幸福度の比較

	男性 (n=400)	女性 (n=318)	t 値
平均	13.41	13.92	2.57*
S.D.	2.55	2.80	

\* $p < .05$

( $df=716, n=718$ )

表 3 より, 低創造性群と高創造性群の主観的幸福度の平均値は, 1%水準で有意差が見られ, 創造的態度の高い学生は, 主観的幸福度も高いという実態が把握された。表 4 より, 5%水準で女性は男性よりも有意に主観的幸福度が高いことが明らかとなった。

次に, 全体の主観的幸福度のうち, 高い主観的幸福度グループ (H グループ) と低い主観的幸福度グループ (L グループ) の各創造的態度に違いについて比較していく。H グループと L グループは主観的幸福度の平均値 (13.6 点) を用いて高い群と低い群に分けることとした。両グループの創造的態度の全体像を表 5 に, 両グループの比較結果を表 6 に示した。

表 5, 6 の結果より, 主観的幸福度が高い学生は低い学生よりも「柔軟性」, 「進取性」, 「持続性」, 「想像性」, 「協調性」は有意に高いが, 「分析性」には有意差はないという特徴を示した。

#### 4. まとめ

本研究では, 創造的態度と主観的幸福度の関連性を中心に, さらには性別の違いという観点を加えて検討した。

まず, 幸福度研究では広く一般的に女性の方が男性と比較して主観的幸福度が高いと言

表 5 各群の全体像

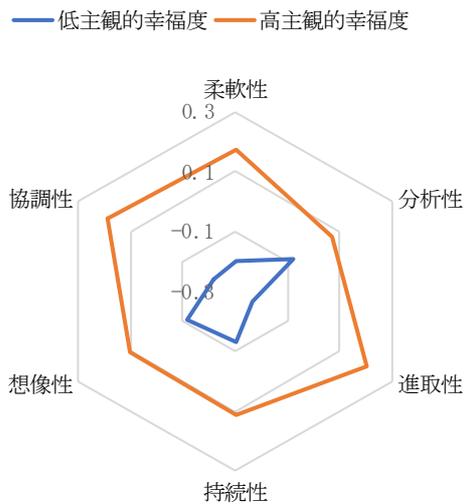


表 6 各群の創造的態度の比較

	低幸福度群(n=336)		高幸福度群(n=382)		t値
	M	SD	M	SD	
柔軟性	49.21	8.89	52.6	9.28	**
分析性	27.56	4.68	28.28	5.09	
進取性	33.64	5.84	36.25	5.72	**
持続性	19.62	3.25	20.42	3.48	**
想像性	17.31	2.89	17.94	2.90	**
協調性	17.94	2.84	19.12	2.84	**

\*\* p < .01 (df=716, n=718)

われ、また、創造性と幸福度の関連性が報告されているように、性別と創造性に交互作用が働き、幸福度がより高くなるということが予想されたが、本研究では両要因がお互いに影響しあっている結果は得られなかった。

創造的態度高い人の方が低い人と比べて主観的幸福度が高いという結果が得られ、創造性と幸福度の関連があると考えられる。この結果は Machado et.al. (2009) でも報告されていることから先行研究と整合性のある結果となり、教育的意味を含む創造性であっても幸福度との関連性が示唆された。

また、性別の観点では、本研究では、女性の方が有意に主観的幸福度が高いという結果となったが、これは上述の先行研究をはじめ、幸福度研究では広く一般的に知られており、整合性のとれる結果となった。

次に逆の観点から、幸福度が高い人は低い人と比べて、柔軟性、進取性、持続性、想像性、協調性が有意に高いものの、分析性は有意な結果は得られなかった。これらの結果は「ハーバード成人発達研究」の長年の研究や Kashdan and Steger (2007)でも同様に報告されており、特に、Kashdan and Biswas-Diener(2014)では幸福度が低い人は物事を細かく分析する能力が高いと主張していることから、分析性は主観的幸福度に影響がなかったと考えられる。

以上、主観的幸福度に対して影響を及ぼさない創造的態度因子がありながらも、全体的に見ると、創造的態度高いと主観的幸福度も高いという結果が明らかとなった。主観的幸福度を教育により直接高めることはできないが、創造的態度であれば高めることができる。そのため、男女差はあるものの、創造的態度の各因子をバランスよく育成することが、主観的幸福度を高める上で重要である可能性があると考えられる。このことから、主観的幸福度を高める上で創造的態度を育成する重要性が示唆された。

## 引用文献

- 青木徹, 福井昌則, 2019. 大学生の主観的幸福度と創造的態度との関連性. 日本教育心理学会 (未投稿)
- OECD, 2017. *How's Life? 2017: Measuring Well-being*, OECD Publishing.  
[https://doi.org/10.1787/how\\_life-2017-en](https://doi.org/10.1787/how_life-2017-en). (最終閲覧日: 2019年5月10日)
- 恩田彰, 1994. 創造性の展開. 恒星社厚生閣.
- Shenk, J.W, 2009. *What Makes Us Happy?*.  
<https://www.theatlantic.com/magazine/archive/2009/06/what-makes-us-happy/307439/>. (最終閲覧日: 2019年5月11日)
- 繁榊算男, 横山明子, サム・スターン, 駒崎久明, 1993. 日米学生の創造的態度の因子分析による比較研究. *心理学研究* 64(3), 181-190.
- 島井哲志, 大竹恵子, 宇津木成介, 池見陽, Lybomirsky, S, 2004. 日本版主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale: SHS)の信頼性と妥当性の検討. *日本公衆衛生雑誌* 51, 845-853.
- Diener, E., Suh, E.M., Lucas, R.E., and Smith, H.L, 1999. Subjective Well-being: Three Decades of Progress. *Psychological Bulletin* 125, 276-302.
- Easterlin, R., 1974. Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence. *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*. Academic Press, New York.
- Fredrickson, B.L, 1998. What good are positive emotions?. *Review of General Psychology* 2, 300-319.
- Kashdan, T. and Biswas-diener, R, 2014. *The Upside of Your Dark side: Why Being Your Whole Self -Not Just Your "Good" Self-Drives Success and Fulfillment*. Hudson Street Press, New York. (高橋由紀子(訳), 2015. *ネガティブな感情が成功を呼ぶ*. 草思社. )
- Sternberg, R. J, 2003. *Wisdom, Intelligence, and Creativity Synthesized*. Cambridge University Press.
- Richard, L, 2005. *Happiness-Lessons from A New Science*. Penguin books, New York.
- Machado, F., Rego, A., Leal, S. and Cunha, M. P. E, 2009. Are Hopeful Employees More Creative? An Empirical Study. *Creativity Research Journal* 21, 223-231.
- Kashdan, T.B. and Steger, M.F, 2007. Curiosity and pathways to well-being and meaning in life: traits, states, and everyday behaviors. *Motivation and Emotion* 31, 159-173.